

湯ノ花鐘撞堂遺跡の住居跡（南会津町館岩）

奥会津地域において、縄文時代の炉跡・焼土が確認される事例はあるが、土を掘り込み柱穴を持つ住居跡が確認された遺跡は少ない。炉は竪穴住居の中にあるだけでなく、屋外にも設けられることがある。また炉を持たない竪穴建物もある。いずれ人類の生活の痕跡であるが、集落ひとつを発掘するような大規模な発掘調査が奥会津地域では行われていないことによる。

館岩村湯ノ花（現在は南会津町）の鐘撞（突）堂遺跡の調査は1990年に行われた。縄文中期初頭の住居跡1棟が確認された。半径約4メートル、深さ16センチメートルの円形に土を掘り、さらに直径20センチメートルの柱穴5本、焼土跡が2カ所確認された（『館岩村史』第2巻、429ページ、1995年）。

私はこの発掘調査に参加した（『会津嶺新春公開講座・わが昭和村を語る』2022年）。

『館岩村史』のための発掘調査であり、周東一也氏が第1巻（1999年）に「館岩村の先史時代」として、この遺跡について性格を考察しているので紹介する。

先史時代は自然地理的条件を重視し、会津盆地、猪苗代湖周辺地域、下郷町を含む大川流域、只見川流域、伊南川流域の小地域が隣接する外縁文化と影響しあい生まれる文化を考える。館岩村の場合は高杖原、鐘撞堂などに旧石器時代の遺跡の予見をしている。

縄文時代草創期の南郷村（現・南会津町南郷）について周東氏は、月田農園の馬乗番場遺跡で押捺縄文と思われる碎片2個を指摘している。伊南川筋では海拔800メートル前後の高所に発達したテラス状台地や高原湿地（高層湿原）の周辺にあると思われる。月田礼次郎による南郷村高所遺跡の発見は特記されてよく、会津若松市の笹山原遺跡の標高ならびに遺跡環境との比較においても、今後の遺跡探索上の指針を提供している（『館岩村史』第1巻、45ページ）。

周東氏は先行した『南郷村史』第1巻（1987年）の論述においても同様の指摘をし、月田農園内の遺跡について詳述している。加えて宮床湿原・高清水・かくま谷地から草創期の遺物が出る可能性を指摘した（96ページ）。塩川町の芳賀英一氏を訪問した時にも、南郷村の現地踏査をしており、高地に遺跡が存在する特徴を指摘している（2022年12月）。

私は南郷村史のための周東氏の調査・踏査に随行しており、『南郷村史』第2巻（1985年）掲載の石器の実測とトレースを担当した。当時、安藤紫香氏・酒井浩哉氏が担当された。奥会津の縄文展に際する調査で奥会津博物館の渡部康人氏が、月田農園や高清水公園の遺跡から出土した爪形文土器の再調査を担当された。ここまで40年間の経過がある。

館岩村湯ノ岐川と鍛冶沢の合流地点にある湯ノ花・鐘撞堂遺跡の立地は標式（モデル）になる。狩りの拠点、川漁の漁場としても良い。そして館岩村で唯一、縄文時代早期から中期までの長期間の遺物が確認できる。

